The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『払惑袖中策』の成仏論

木内堯大

はじめに

『払惑袖中策』（以下『策』）は最澄著作とみなされるものの、古来より真偽上の問題を含む一書である。[1] 上下二巻、四十章にはそれぞれ問答形式の体裁が採用される。上巻は主に歴史上の釈尊に関する問題が中心として扱われ、真撰とされる最澄著作にはあまり見られない内容に言及されていると言える。一方下巻には、最澄が徳一との論争の主題としてきた権実に関する問題、一乗戒の問題などが扱われ、最澄教学との関連性が強く見られる。『策』には最澄真撰著作から目立った逸脱をしている記述が見られず、最澄撰述ではないということを特定することは困難であり、特に最澄真撰著作に言及されない問題は、対照の方法すらないのが現実である。

しかし、本稿では、最澄教学とも密接に関わり、両者を比較対象とすることができる問題、則ち成仏論に関して、最澄真撰とされる著作と『策』との同異を詳細に検討し、真偽問題に関する一つの示唆を与えることを目的としたい。

『払惑袖中策』の成仏論

『策』下巻には、「第二弁論頓成」「第三定性成仏」「第四木石仏性」の四章に亘って、成仏論に関する言及が見られる。「第二弁論頓成」では即身成仏に関する問題が扱われる。[2]「即身成仏」の語の初出は湛然であるが、初めて即身成仏が本格的に論じられたのは、最澄晩年の著作『法華秀句』「即身成仏化導勝八」であり、[3] そこには龍女成仏をめぐる即身成仏論が展開されている。[4] 龍女成仏理解の一つの問題は、はじめに文珠から海中で説経を受けたときに、無生法忍を得て凡身を捨てたのか、それとも凡身を捨てることなくそのまま聖位に入ったのかという点にある。[5] また、天台教学としては、その時点で龍女は円教の聖位である初住に入るということが定説となっている。

『策』では龍女成仏に関して以下のように述べられている。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

答。龍女之身、乃有二前凡後聖之殊一。証聖之上、亦分二実体権身之別一。莫レ不下並依二妙経円乗之力一、而有中実証権巧之用上。是故。法性取捨。転レ女成レ男、実相体用、此化彼利。若実若権。惣而論レ之、龍女昔在二本宮一、聴二於文殊説経一之時、応三是捨レ凡入二初住位一。準二山頂経一、乃至超二入第八地位一。従二初住一既得二法身実本一。故能随レ縁、示二現速成之相一。況乎進入二第八地位一。

（『伝全』三・三一一～三一二）

凡身である龍女が、文珠説経を聞き、凡身を捨てて初住位に入り、法身の実本を得る。その後、霊鷲山で権に凡身を示し、南方で権に速成を示すと理解できる。このように『策』には、即身成仏に関して、龍女成仏の基本的なポイントが整理されており、天台教学から見て特に問題はないと言える。

『法華文句』には「登二初住一得二無生法忍一者、円菩薩位也。」（『大正蔵』三四・一三六頁b）とあり、天台教学において、円教の菩薩は初住に登る時に無生法忍を得ることは定説となっている。この説は最澄の『守護国界章』（以下『守護章』）にも見られ、(6) 最澄にも、円教の菩薩は初住に聖位となり作仏するという認識があったことは疑いようがない。また、『守護章』に

其華厳経梵行品云、初発心時、即得二阿耨多羅三藐三菩提一。知二一切法即心自性一、成二就慧身一、不二由レ他悟一。已十住初住、便成二正覚一。何不レ能レ立二聖位之名一。汝執二歴劫位一、難二直道頓位一。豈不レ違二教理一哉。

（『伝全』二・二七五）

とあるように、最澄にとって、これは歴劫に対する、直道の頓位を意味し、初住に正覚を得るという認識である。

また、湛然『法華文句記』では、凡身を捨ててすでに聖位となっている龍女が、権に成仏速疾であることを示すと理解できる記述があり、この点においても『策』には湛然説に対する検討が示されているといえる。

正示二円果一中、云二龍女作仏一者、問為下不レ捨二分段一即成仏上耶。若不二即身成仏一此龍女成仏、及胎経偈云何通耶。答。今龍女文従レ権而説、以証二円経成仏速疾一。若実行不レ疾権行徒引。是則権実義等理不二徒然一。（略）豈不レ能レ知三本無二捨受一。何妨二捨レ此往一レ彼。余教凡位至二此会中一、進断二無明亦復如レ是。凡如レ此例、必須三権実不二、以釈二疑妨一。

（『文句記』『大正蔵』三四・三一四b～c）

一方、最澄には文珠の説経を聞いた時点で初住に入るという具体的な記述も見られず、文珠の説経を聞いた時点での、凡身の捨に関する言及が見られない。(7)

有人云。変成男子者、未レ免二取捨一。今謂。法性取捨、法性縁起、常差別故。法性同体、法性平等、常平等故。常平等故、不レ出二法界一。常差別故、不レ礙二取捨一。

（『法華秀句』『伝全』三・二六四）

ここで議論されるのは、文殊の説教を聞いた時点での凡身の取捨に関してではなく、南方での取捨に関してのみである。従って、最澄は湛然教学への対応ということに関して、いま

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

だ途上段階であったとも言える。一方、先述の通り『策』ではこの点が克服されており、最澄よりも湛然教学への対応・受容が進んでいると見ることが可能である。

また、『策』の特徴として、『伽耶山頂経』に見られる八地位聖位説の扱いがあげられる。以下の文に見られるように最澄は徳一との論争の中で、『山頂経』の説を否定している。

即入之言者即身無レ異。他宗所依経、都無二即身入一。雖二一分即入一、推二八地已上一、不レ許二凡夫身一。天台法華宗、具有二即入義一。四衆八部一切衆生、円機凡夫、発心修行即入二正位一、得レ見二普賢一。不レ推二八地一、許二凡夫一故。

（『法華秀句』『伝全』三・二六七）

ところが、『策』では、『山頂経』の説と天台の説はどちらが優れているかという問いに対して、八地説を自説の中にも用いて初住説と対比させている。もちろん『山頂経』の説が劣るという意味で用いられているのであるが、最澄が否定する『山頂経』の説を円教の行位と対比させている点は問題点となろう。

また、安慧の撰とも言われる『愍諭弁惑章』は、最澄撰述として扱われてきたこともあり、『策』と同様な位置づけがなされる論書とも言える。

所レ言変成意、謂二転変一。非レ謂二転捨一。意云、龍女由二法華力一故、転二変現身一、成二丈夫之身一。故云二変成一。不レ謂下捨二此女身一、更取二彼仏身一、名レ之為レ変。（略）問経文但言二変成一、而不レ言二捨身一、汝云何言レ捨二女身一。経不レ言レ捨、汝強言二捨身一、我亦経不レ言レ即、強言二即身成一、此何失乎。

（『伝全』三・三七一～三七二）

ここでは、龍女成仏を転捨ではなく、転変とするとし、凡身を捨てることによって初住に入るのではなく、凡身を転変させることによって聖位に入るという理解になっている。これは円仁以降採用される説と近いが、[8]『策』では、この転変説を用いることなく、中国天台の伝統的解釈を確実に咀嚼している点が特徴と言えよう。

次に、「第三定性成仏」では、定性の二乗の成仏に関して、最澄著作と『策』では同様の見解が示されており、最澄説との矛盾は特には見られない。

しかし、次の『策』の文に見られる「四時不了義教」という語は、最澄の用いる用語としては不適切と思われる。

応レ知。華厳、阿含、方等、般若、四時之教者、未二彰言二説二乗成仏一。故法華云二未曽説汝等、当得成仏道、所以未曽説、説時未至故、今正是其時、決定説大乗一。無量義云二四十余年未顕真実一。天親論師、亦指二法華一、名二真実教一。是故、今依二法華涅槃等真実教一、建二立二乗成仏之義一。若依二四時不了義教一、未レ合レ説二二乗得仏一。故諸経論、多有二定性不発之説一。

（『伝全』三・三一三～三一四）

『秀句』には爾前の四教と、『法華経』との関係について以

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

下のような記述が見られる。

当レ知。已説四時経、今説無量義経、当説涅槃経、易信易解。随他意故。此法華経、最為難信難解。随自意故。

（『伝全』三・二一五一）

当レ知。釈迦世尊、先以二方便一説二三乗教一。是則第五釈迦文仏道同先三之文也。未二究竟一故、不二真実説一。言二随其本性一者、示二旧熏性一。言二方便力故、而為説法一者、指二法華之前四時之教一。故経云二四十余年、未顕真実一。阿毘達磨両箇宗、修多羅華厳宗、四十余年被二包含一故、未二究竟一。故仏無二会釈一

（『伝全』三・二四九～二五〇）

ここでは、『法華経』は真実教であり、随自意なるが故に、方便説である爾前の四教に勝るということが示される。しかし、「不了義教」という語は『守護章』で徳一が自説の根拠として引用する『解深密経』に用いられる用語である。そして、『守護章』では天台所説の円教を不了義とする徳一に対して以下のように反論を加えている。

夫法華之前所説大乗、未二開権一辺、以為二帯権一。

（『伝全』二・五八九）

解深密経者。是方等部也。有レ円有レ別有レ通有レ蔵。所帯別等為レ麁為レ権。誰以二其円一為二権不了一。麁食者、未レ了二教与レ部。方等部経、一部為レ権、一部為レ実。迷謬甚哉。

（『伝全』二・五九〇）

最澄は『法華経』以前の四時の経の中にも円教は説かれ、そこで説かれる円教は「不了」義ではないと述べている。これによって、『払惑袖中策』に見られる「四時不了義経」という表現は、最澄が用いる表現としては適切でないということがわかる。この点においても『策』の筆者と最澄との見解の相違が感じられる。

「第四木石仏性」は、木石などの非情にも仏性があるのかということに関する問答である。これは湛然の『金錍論』などに端を発する問題である。最澄は非情成仏に関して積極的な論を展開することはないが、わずかに『守護国界章』に非情成仏に関する議論が見られる。天台では随縁不変の立場から、木石などの非情にも真如の理性が遍満することを認め、非情にも仏性があるとする。

ところで、これに関して『策』と、『守護章』の記述には異なる見解が見られる。(9)

応レ知、蔵通三乗、別之初心、可下云二無情一。不上云二有性一。円教及以別教後心、可下云二有性一、不上云二無性一。至レ如二大経非仏性者、謂瓦石等一、暫寄二権教一、説二三対治一。

（『伝全』三・三一七～三一八）

このように、『策』では、蔵教・通教・別教の初心では、非情に仏性を認めないが、別教の後心・円教では非情の仏性を認めるとある。すなわち教の異なりによって非仏性・仏性をわけるという見解となっている。

これに対して、『守護章』には以下のようにある。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

弾曰、此亦非レ爾。未レ解二三非一故。非二如来一、非一涅槃一、非二仏性一、此三非者、非二永非一故、約レ位非故。若言三牆壁瓦礫、非情之物、永非二仏性一者、即為三心外有二色等法一。深違二唯心大乗理教一。

（『伝全』二・五二四～五二五）

『守護章』では、非情を非仏性とするのは、約位によるものであり、非仏性は永非ではないとする。すなわち、『策』と『守護章』では、非情成仏に対する見解として「教」と「位」という相違が見られるのである。また、『守護章』では、「唯心大乗」の理教とあるように、唯心を重視し、外的環境はすべて心によって生ずるという見解になっている。

一方、湛然『金錍論』には「則随縁不変之説、出レ自二大教一。木石無心之語、生一于小宗。」（『大正蔵』・七八二c）とある。湛然の非情仏性義は、衆生の仏性を理性正因とし、理性の正因の体が一切処に偏在するという真如縁起から来る理解である。大乗説では非情仏性を主張するという点で最澄と湛然の説は共通するが、真如縁起と最澄の主張する唯心は必ずしも同意とすることはできないと思われる。

それでは、『策』に見られる「教」の相違という見解はどこから来たのかと言えば、それは湛然説に由来すると考えられる。例えば『止観輔行伝弘決』には、「自山家教門所レ明中道唯有二二義。一離断常、属二前二教一。二者仏性、属二後二教一。」（『大正蔵』・一五一c）とあり、天台の中道には二義があり、別円ではそれを仏性と呼ぶとする。また、同書には、「別教後心亦破二無明一。」（『大正蔵』四六・三七〇c）とあり、「無明を破す」ということを成仏と同義ととらえれば、『策』の「円教及以別教後心、可下云二有性一、不上云二無性一。」（前引）の説と一致すると言える。この点からも最澄説よりも『策』の方が湛然教学の受容が進んでいるとみなすことができよう。

「第五無性仏性」に関しては、特に最澄説との矛盾は感じられない。『策』に見られる文のほとんどは『法華秀句』中巻の世親『仏性論』を巡って展開される議論の部分から引用されている。強いて言うならば、無性に仏性がある根拠が提示されていない点が気になるぐらいである。この章では世親『仏性論』の小乗では仏性の有無を論じ、大乗では仏性の有無を論じることはなく、小乗の議論はまったく無意味であり、仏性は必ず偏在し、大乗ではその有無すら論じることはないという立場が示されるだけである。

結

龍女成仏における、文殊説経の時点で凡身を捨て、初住位に入るのかという問題、定性成仏における「四時不了義」という語の用法、木石仏性における教と位の相違など、『策』では、様々な点において、天台・湛然教学の受容が最澄説よりも進んでおり、最澄説を補うかのように、論理が展開され

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ている。

もちろん、これによって『策』の撰述者が最澄でないということを確実に論証できたとはいえない。しかし、『策』の中に空海帰朝以後に翻訳された「心地観経」という語が見られるという事実[10]を合わせて考えれば、やはり、『策』を偽撰とするのが適当ではないかという結論に至るのである。

1　『修禅録』では「右外」の項目に記載されるが、『龍堂録』『可透録』『台宗二百題』等では真撰として扱われる。（『修禅録』の成立に関して調査の必要があろう。）近代の研究では、塩入亮忠『伝教大師御撰述現在目録』（『伝教大師』所収）、同『仏書解説大辞典』、「守護国界章解題」（『国訳一切経和漢撰述諸宗部十七』）等で真偽未決とされるものの、「伝教大師の権実問題を見るに書くことの出来ぬ書物」として、真撰に準じた扱いがなされる。浅井円道『上古日本天台本門思想史』、大久保良峻『山家の大師　最澄』等では偽撰として扱われる。しかし、大久保氏は『策』に空海帰朝以後に翻訳された「心地観経」の語があることから最澄真撰が疑わしいとするも、「最澄撰述としても突出したものではなく、しいていえば問題の取り扱いが他の真撰と異なるということである。したがって、完全に真撰を払拭するような見解が示されず、やや曖昧なまま活用されることにもなる」とも述べ、真偽を決定する困難さを示されている。

2　『法華文句記』（『大正』三四・三一四b）。

3　『伝全』三・二六〇。

4　龍女成仏とは『法華経』提婆達多品に見られる話であり、畜生であり、八歳であり、女身である龍女が海中の本宮で文珠の説法を聞き成仏し、それを疑う智積菩薩と舎利弗の前で、男子に変わり、南方の無垢世界へ行き、さとりを得て成仏することを見せたという内容である。

5　この点に関して、大久保良峻「天台教学における竜女成仏」（『日本仏教綜合研究』四・二〇〇五）に詳しい論考が見られる。

6　例えば『伝全』二・二七五など。

7　前掲大久保論文、同「最澄の成仏思想」（『仏教学』四八・二〇〇六）、同「最澄の教学における成仏と直道」（法華仏教文化史論叢・二〇〇三）参照。

8　大久保良峻『天台教学と本覚思想』（法蔵館・一九九八）同『台密教学の研究』（法蔵館・二〇〇四）所収論文参照。

9　拙稿「最澄教学における一・二の問題―非情仏性義をめぐって―」（『印仏研究』五七―一・二〇〇六）。

10　前註1参照。

〈キーワード〉　払惑袖中策、最澄、即身成仏、非情仏性義

（大正大学非常勤講師）

NII-Electronic Library Service